

Ⅱ-9. ICF 及び ICF-CY を含めた分類の電子的な共有について

－ ClaML(Classification Markup Language) の動向を中心に－

キーワード ICF-CY ClaML XML

1. 文書の電子化について

人類は、長い間文書表現の媒体として紙を利用してきた。紙の文書は多くの優れた特性を備えている。軽く、保存や運搬に優れている。読み書きに大げさな道具が必要なわけでもない。紙による文書は保存状態に恵まれれば、数百年以上の時を超えてその内容を伝えることができる。一方、電子化された文書だとうはいかないように思われる。特に、近年はコンピュータ向けに新しいデジタル記録媒体が次々と登場し、少し前に登場した記録媒体は廃れていっている。これらの媒体に記録された文書が百年後に可読であるためには、保存状態に恵まれていたとして、ハードウェア、ソフトウェア両面で環境が整っている必要があるが、そのような条件を満たすのは困難であることが予想される。しかし、そのような困難を補ってなおありあまるメリットが文書の電子化にはある。

文書等を電子化する意義の一つは、その管理・流通コストの削減である。電子的なネットワークが高度に発達した現在、一旦電子化された文書をやりとりすることは比較的容易である。もう一つの意義は、電子計算機の検索機能を利用できることである。我々が現在議論の対象としている ICF や ICF-CY も非常に項目数が多く、人間の目で一つ一つ検索・確認するのは、暗記でもしていない限り現実的ではない。

文書等を電子化する方法は、テキスト形式、ビットマップ（画像）形式、PDF 形式等、様々あり、それぞれ長所・短所がある。次節で紹介する ClaML は、ICF や ICF-CY を含む、WHO-FIC(Family of International Classifications)を電子的に記述し、交換、共有する目的で設計された言語である。

2. ClaML について

ClaML は、Classification Markup Language の頭文字をとったものであり、classification を記述するためのマークアップ言語(Markup Language)である。マークアップ言語とは、文書の一部をタグ(Tag)と呼ばれる特別な文字列で囲うことによって、文書の構造を記述するための言語である。ClaML は、XML(Extensible Markup Language)という拡張可能なマークアップ言語で設計されており、WHO-FIC を記述するのに採用されている。

XML は、拡張性が高く、ネットワーク上でデータ交換のフォーマットとしての優れた特性を備えている。たとえば、医療分野には、異なる医療機関の間で診療データを正しく交換するための MML(Medical Markup Language)という XML で設計された規格がある。医療機関 A と医療機関 B の間で患者 C のカルテのデータ交換を行う際、①医療機関 A は、医療情報データベースから独自の形式で患者 C のカルテのデータを取り出す。②医療機関 A の形式のデー

タを MML 形式に変換し、医療機関 B に送信する。③医療機関 B は MML 形式のデータを独自の形式に変換して利用する。このようにすることで、お互いのデータベースの独自性を保持したまま、情報の交換・共有が可能になる。

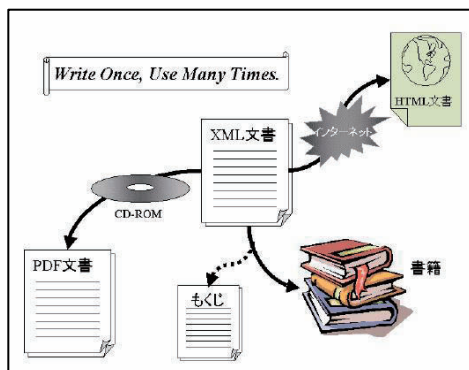


図 1 : XML 文書とその応用のイメージ



図 2 : DIMDI の ETC の Web サイト

2.1 WHO-FIC Electronic Tools Committee (ETC)について

チュニジアのチュニスで、2006 年に開催された WHO-FIC Network の年次総会のテーマは “Information Paradox” であった。国家における健康情報の取り扱いについては、その重要性の割には十分に検討されていないことが多い。WHO-FIC Network 内の電子ツール委員会 (ETC) における最大関心事は WHO-FIC 分類の交換の規格としての Classification Markup Language(ClaML)の採用であった。国によるコードの変更の詳細を WHO に提供するために、ClaML の簡易版(ClaML light)を生成することが合意された。

2.2 German Institute of Medical Documentation and Information (DIMDI)について

DIMDI は、WHO の協力センター(WHO Collaborating Center)のひとつである。DIMDI と WHO は、WHO-FIC Classifications のための ClaML を管理するためのツールを開発している。

これらの動向を踏まえ、教育施策における ICF-CY 活用のためのツールを検討していく際にも、ClaML の活用について、今後の検討材料の一つとしてとらえるべきではないかと考えられる。

引用文献

- 1) 渡邊正裕, 勝間豊, 渡邊章, 早坂方志, 中村均 : 国立特殊教育総合研究所における XML に基づいた法令データベースの構築の検討, 国立特殊教育総合研究所研究紀要第 28 巻, 123-130, 2001.
- 2) WHO: WHO-FIC Network Activities Annual Meeting, Newsletter of the National Centre for Classification in Health Vol. 14 No. I Jun, 2007.
- 3) DIMDI WHO-FIC Electronic Tools Committee
<http://www.dimdi.de/static/en/klassi/koop/who/etc/index.html>

(渡邊正裕)